

スク、メドウフェスクおよびシロクローバが混生し、50トン/haの草収量をあげるといふ。マメ科草種が消失すると8月過ぎから草量が減少し、放牧効率が低下すること、放牧管理を合理的に行えば掃除刈の必要がないこと等の説明を承つた。さらに、草地は更新しないで追肥、追播、デスクングによつて20年位維持したいとのことであつた。種々学ぶところが多かつた。

米 米 米

最近、オランダのクラス博士の講演を聞く機会があつたが、オランダではペレニアルライグラスの耐寒性品種の育成によつて草地の大半がペレニアルライグラスで占められるようになったといふ。その特性は、高収量、持続性、早春からの利用そして造成後の利用が早いという点があげられている。道南地方における適応性と利用法をテストする必要があるとす。また、火山降灰物の影響を受け理化学的の劣悪な土壌が多いので、この観点からも適応草種(品種)の選定が必要である。

森林資源の豊富なこの地方では外延的に草地の拡大を図ることは困難なように見受けられたが、温暖な気候を武器にして草地利用の集約度をさらに高めることが可能であろう。道南畜産の確立と発展を期待して止まない。

今回の旅行は始めから終りまで十分な満足を感じたが、幹事の方達のなみなみならぬご努力と現地側のご配慮にもとづくものと深く感謝する次第である。

現地研究会に参加して

田 辺 安 一*

北海道の玄関口である道南地方は、道央以北とは異なつた自然のおよび社会的条件下にあり、主として道東地方しか知らない筆者には未知の地方であつた。今回の現地研究会は、渡島および檜山支庁管内の「草地農業の実態と問題点」がテーマで、日頃この地方の草地農業に関心の深い会員および青森県からの参加者10名、計130余名が、2台のバスに分乗し、3日間に、主要拠点7カ所を視察できたことは、非常に意義深いものであつた。

第1日目は、秋晴れの札幌市テレビ塔下から9時過ぎに出発し、10時半過ぎから余市町のウイスキー工場で、その製造工程を見学後、三股副会長の挨拶、中央農試桜井部長から、特に道南の肉牛飼養の位置づけと放牧期間が200日に及ぶ点を指摘された。往年の榮華がしのばれるニシン御殿での芳潤な香りの一杯のウイスキーで、参加者は出発前後の緊張感がほぐれ、一路南下した。ニセコ連峰の山容を心行くまで眺め、長万部でやや遅い昼食をとり、噴火湾を左にして静まりかえつた駒ヶ岳山麓の鹿部村宮牧場に到着したのは夕暗迫る6時少し前であつた。

鹿部村畜産課長の概説によると、この村の肉牛飼養は典型的な沿岸漁家兼業対策で、昭和39年から熊本および秋田県から褐毛和種を323頭導入し、現在450頭(個人20戸で約100頭、協

* 新得畜産試験場

業350頭)に達した。牧場は駒ヶ岳の南斜面で噴火の際にできた軽石層の厚さが1m以上あり、通常の穀しゆく作物の栽培が不可能なため、野草地として放置してあつたものを草地化したものである。総面積680ha、重デスクによる耕起と部分的に地均して造成した草地は186haで、他は野草地として利用している。造成草地のうち120haは採草利用している。造成時にイネ科とマメ科が混播されたが、現在はイネ科が優先し、オーチャードグラス主体で20t/ha、チモシーは生産不良のため1番草利用のみで10t/ha程度の草量である。本年はヨトウムシの食害により50haが収穫できなかつた。46年の入牧は5月25日、下牧は10月下旬の予定で、入牧料金は野草地を主体としているので、仔付きで500円/月ときわめて安い。採草用機械は一通り揃っているが、オペレーターが不足している。本年は広域市場に50頭出陳予定とのことであつた。ほとんど暗くなつた牧場を後にして、(1)漁家の兼業対策として肉牛がどの程度定着するのか、(2)運営体制が村営と協業が入り組んでいて複雑であるが、整理が必要でないか、(3)粗粒火山土壌で生産力が低いが、どの程度まで高め得るか、特に保水力が弱いので、灌漑施設の整備を進めているが、生産性を高めるには有効な手段であるが、採算が合うか、などと考えながら大沼の宿に向つた。

名物のシユンサイ、ワカサギに舌づつみを打ち、早朝の大沼の眺めなどで旅の疲れのとれた2日目は、きり雨も止み青空ののぞく8時過ぎに出発した。大野平野から右に折れて、山道をバスで約半時間あえぎ登り、大野町有牧野に到着した。標高630mの牧野からは、駒ヶ岳、大沼、小沼、大野平野の黄金の波、函館を一望でき、しばし雄大な景観に目を奪われた。小林道南農試場長から道南農業の概説があつたが、「開拓の扉の陰にかくれた道南」の一言は印象的であつた。町産業課長から、大野町では稲作あるいはそ菜経営に肉牛をプラスする方向で指導している。この牧野は昭和33年から各種事業を継続し、総面積1,200haのうち、現在300haを耕起法(230ha)、蹄耕法(70ha)で草地化し、47年以降500haの改良を実施、50年には800haの改良草地を有する大牧野を計画している。傾斜地で起伏が多く、多数の小沢のある牧野は8群37牧区に分け、褐毛和種400、日本短角種300、外に乳牛50、馬100頭が放牧されている。肉牛は種雄牛各3頭を牧牛としているが、受胎率は良好とのことである。草地は造成時にオーチャードグラス外数草種を混播したが、現在はオーチャードグラスが優占し、部分的に原植生のシバの生育が認められる。追肥はN:30、P₂O₅:10、K₂O:40Kg/haで、草量は30t/haを維持している。放牧期間は5月~10月の180日に及ぶことは草地の利用には有利である。しかし、5月の過剰草の処理(乾草調製)と9月、10月の草量不足から過放牧、増体不良などが問題となつている。将来800haに拡大される頃には、道南の肉牛飼養の一大基地となり、その景勝から多くの人々が訪れることが期待できよう。

10時過ぎに牧野を辞し、山合いを縫うようにして一路日本海岸に向つた。約1時間で江差町に出て、南下し正午に上の国町に到着。福祉センターで昼食後、町畜産係長から八幡牧野の概況説明があつた。この牧野については約500年前の古い伝説があり、北海道の牧野利用の起源といわれている。市街地から約3km、西は日本海に面し、標高100~200mの丘陵台地で、海上遙かに奥尻島が遠望できる景勝地である。事業主体は町、管理主体は農協が当り、総面積540ha、造成草地231ha(採草地21ha、放牧地210ha)、冬期舎飼用として繁殖育成センター1棟(120

頭収容)がある。45年度の実績では、日本短角種347頭(一般農家186頭、繁殖育成センター161頭)、馬133頭を5~10月の180日放牧している。放牧期間は草生によつては11月末まで延長することも可能とのことであつた。草地はオーチャードグラスが優占し、採草地で70~80t/haに達するが、放牧地は20~25t/ha程度である。施肥量はN:33、P₂O₅:62、K₂O:62Kg/haで、放牧終了後に堆肥20~30t/haを散布している。放牧利用料は成牛で1月1頭当たり1,000円で比較的安い。この牧野で問題となつているのは、(1)事業主体と管理主体が別であること、(2)草量の低下した放牧地の更新費用の捻出、(3)沢地帯におけるタニ対策、(4)舎飼期はサイレージの併用を計画しているが、未だにサイロおよび調製機械が整備されていない、(5)クマによる事故防止対策などがあげられていた。

2時近くに牧場を出発し、3時頃木古内市街を通過、白神岬を右にして、おだやかな津軽海峡を眺めながら4時頃に上磯町当別のトラピスト修道院に到着した。海に面した緩傾斜地に建つフランス系修道院は余りにも有名であり、創立以来、畜産振興に貢献されてきたことは周知のとおりである。農場長の案内で、畜舎、礼拝堂、バター、ビスケット工場を見学した。農場は耕地60ha(牧草地52ha、その他8ha)で、乳牛80頭を飼養している。放牧地は12ha、採草は1番草はサイレージ、2番草を乾草としているが、本年は7月中旬から50haにアワヨトウが異常発生し、イネ科牧草をほとんど喰尽され、乾草は約100t不足とのことであつた。この農場で特記すべきことは、15年前から用いられている自然風力乾燥器による乾草調製、および乳酸菌を添加したグラスサイレージ調製である。またアルファルファの栽培を試みているが、未だ成功していないようであつた。夕暗迫る修道院を辞し、函館山の百万ドルの夜景に満足して、湯の川の宿に着いたのは7時過ぎであつた。総会(会計報告、予算)を終え、懇親会で2日目までの感想を深更まで話し合う会員が多かつた。

秋晴れの3日目は8時に出発し、国道5号線沿いの赤松並木の枝振り、ゲルトネルのブナの美林を觀賞しながら、やがて小沼の畔を通過し、美しい駒ヶ岳を間近にした曾田シヤロレ牧場に到着した。白塗りの一連の建物をバックに曾田2世は、フランス原産シヤロレの特性、昭和36年に開設した牧場のあらましを約1時間熱心に説明された。傾斜地で表土が背薄なため、野草地にチモシー外3草種を3~4年に1回播種、さらに急傾斜地にはイタリアンライグラスを2~3年に1回播種し、漸次草量20t/ha程度の草地化する蹄耕法を実施している。放牧はha当り1頭で、5月10日から11月20日まで、冬期は別に八雲町の採草地で調製した乾草とイナワラを給与し、原則として濃厚飼料は給与していない。現在、シヤロレ純粋種350頭を飼養し、繁殖雌牛150頭から年間130頭を生産している。これらのうちから米国に輸出しているのも、この牧場の特色である。最近、畜産界に進出してきた一般の企業経営とは異なつた存在のこの牧場は種々の意味で参考になつた。

おだやかな噴火湾沿いに北上し、八雲市街から約7km、噴火湾を一望できる標高240mの高台にある八雲町営乳牛育成牧場に11時過ぎに到着した。町畜産係長の概況説明によれば、八雲町の乳牛増殖目標1万頭達成の一環として、この牧場は昭和37年に農家8戸から270haを売却し、現在採草地60ha(低台)と放牧地150ha(12牧区)を草地造成した。造成時にはクマ対策のため

見通しのきくように樹木は皆伐し、多少の高低を均し、ソダ暗渠を入れ、牧区によつて多少異なるが、オーチャードグラス、メドーフェスク、トールフェスク、シロクロバを混播し、施肥量は $N : 15$ 、 $P_2O_5 : 45$ 、 $K_2O : 30 \text{ Kg/ha}$ を草生に応じて分施し、前2カ年平均で生草 50 t/ha を維持している。7年目草地でも良好な植生であり、今後20年は蹄耕法的方法も利用して維持したいとのことであつた。使用料は1日1頭当たり夏は100円、冬は150円であるが、今後それぞれ120円、250円にアツプする予定である。なお、畜舎はルーズバーン式と繋留式の折衷的なもので一見に価する。問題点としては、(1) 町営から経済団体への運営の移管、(2) 放牧期の乳房炎の防止対策、(3) 47年に収容能力を50頭増やすために30haを造成する予定であるが、補助事業にすると経費がかさむので町単独事業とすることなどであつた。

この後は、長万部で昼食、紅葉の洞爺湖畔、中山峠、定山溪を経て、夕暗迫る札幌のテレビ塔下に無事到着、3日間の研究会は解散した。

この3日間、道南地方を一周する900Kmにわたる行程と、折角の機会とばかり、わがままになつた参加者の思いを受け入れ、無事にガイドしていただいた幹事の方々のご苦勞、および現場で懇切な説明をしていただいた関係者に、参加会員各位ともども厚くお礼申し上げる。

最後に、現在、農家・漁家の兼業対策として、点のように散在する道南の肉用牛の中心である各牧場が、気象条件および土地条件を十分に活用されて、将来、大きな面としての草地農業へと発展することを期待する次第である。